

図書室の物陰で...

陰キャ女子の正体は...**淫キャ!**?



全 **69** 枚
・台詞付き **47** 枚
・絵差分 22枚
・精液ボテ **3** 段階

気になる女子に告白したら、
付き合うのはダメだけど、
子作りのOKはもらえた件。

ここはどこにでもある学校の図書室。
時は夕暮れ、放課後の室内に夕日が射し込んでいる。





えいっ

え!?

単刀直入に言う!
とみやま
兎耳山 俺と付き合ってくれッ!

俺はこの日、人生はじめての告白をした。
相手はクラスメイトの女子、とみやまみやこ兎耳山宮子。
地味で大人しいが、そんな清楚な感じが俺好み。
そして何より……、身体つきがエロい。



付き合ってくれるか、フラれるか、二つに一つ。
だが、兎耳山のとった行動は俺の予想をはるかに上回っていた。

これで勘弁して

ブル





^?

♡ちゅっ♡
♡ちゅっ♡

♡ちゅっ♡
♡ちゅっ♡

ちゅっ

ちゅっ...
ちゅっ...



なに…してんだ？
とみやま
兎耳山……

私…人付き合い
苦手だから…

これで許して……
今だけならいいから

むっ
ぢゅ
ぢゅ

むっ
ぢゅ
ぢゅ

あぁ…
あぁ…

なんだこれは…!?
「これで許して」ってのは「一発ヤラせるからもう関わらないで」ってことか!?
たしかにあまり社交的なヤツじゃないけど……、
ど…どんだけコミュ障こじらせてんだ…!!



とはいえ俺も健全な男子の一人、これもある種の据え膳と捉えるならば、
食わぬわけにはいかない。

こちらに向けられた、ピッタリと閉じた無毛の一本すじ、兎耳山らしい処女性の高い性器。
これに魅了されない男はいないだろう。

今だけでも俺一色に染められるなら…と、オス特有の支配欲を駆り立てられる。



今だけなら
エッチしていいから...

え...それは俺は
フラれたってことか...

ど...どっちなさ...
どっちなさ...かも...

もぢもぢ

もぢもぢ

あ...あ...





気が付いたら俺は愚息を取り出していた。
「今回限りならこの一回にかける」とムスコが俺に語りかけるようだ。
言葉でダメなら、身体で語りかけてやる…！

おっ…
おっ…







気が付いたら俺は兎耳山の膣内に入っていた。
気が付いたら腰を前後に動かしていた。



本能のままに腰を前後する。
兎耳山のくびれた腹に俺のチンコの形が
浮かび上がる度に兎耳山を支配してる気がする。





機会が一回だけならと、本気でこのメスを孕ませてやると俺の中のオスが語りかけてくる。欲望と本能がキンタマから込み上げてくる。











私、兎耳山宮子^{とみやまみやこ}は犯され体質。今日もこうして犯されています。自分から犯されてる気がするけど……。

最近は事態がややこしくなる前に自分からおまんこを差し出しています。

それはいいんだけど、みんなすっごい沢山の^{赤ちゃん素}精液お腹の中に出していくから、私の身体もついつい赤ちゃんを作ったがっちゃう。妊娠してなくてもおっぱいが母乳を出すようになってしまったし……。



こう見えて私は何度か男子から告白されてる。
けど、人付き合いが苦手で、他人と親密になるのがちょっと怖い私はいつも断っている。

けど...中出しという、私の生殖本能にダイレクトに語りかけてくる口説き文句に、
いつも私の心は揺らぎそうになる。
子宮

けどそれは、この人の「彼女になりたい」ではなく、
その一歩先の「お嫁さんになりたい」という欲求。

惚れっぽい私の子宮は、精子を受けるとすぐにその人を旦那さんとして認識してしまう。



本気でこの人（の）を
好きになっちゃう...♡

子宮に...生...
い...め...え...

きゅん

ぐわん







兎耳山……! やっぱ
俺の女になれよ!

何がダメなんだ……!

ふん!
うん!
うん!

うん!
うん!
うん!

うん!
うん!
うん!

うん!
うん!
うん!



なればいだろ！
俺の女に！！

キ...キ...キ...キ...
好...好...好...好...
し...し...し...し...

ズッ









とつくの昔に許容量を超えた私の子宮に、半ば強制的に大量の精液が流れ込む。

これ…本気の射精だ…っ♡完全に孕ませに来てる…♡口説きに来てる…っ♡私の卵子に遺伝子刻む気満々なチンポだ…♡

子宮も応えるように「ごきゅごきゅ」と音を立てて精子を飲んじやう。

あ…違う、これ全然強制的な中出しじゃない…っ♡おまんことチンポ、相思相愛なんだ…っ♡







はあ...はあ...
もぐもぐ...

ぽん

ぽん
ぽん
ぽん
ぽん
ぽん



俺はもう一度、兎耳山に告白する。
子宮を俺一色に染め上げられたことで、
兎耳山の中で何か変わったんじゃないかと淡い期待を寄せる。





そうか...わかった...

いぬの...

いぬの...

ぐわ
ぐわ

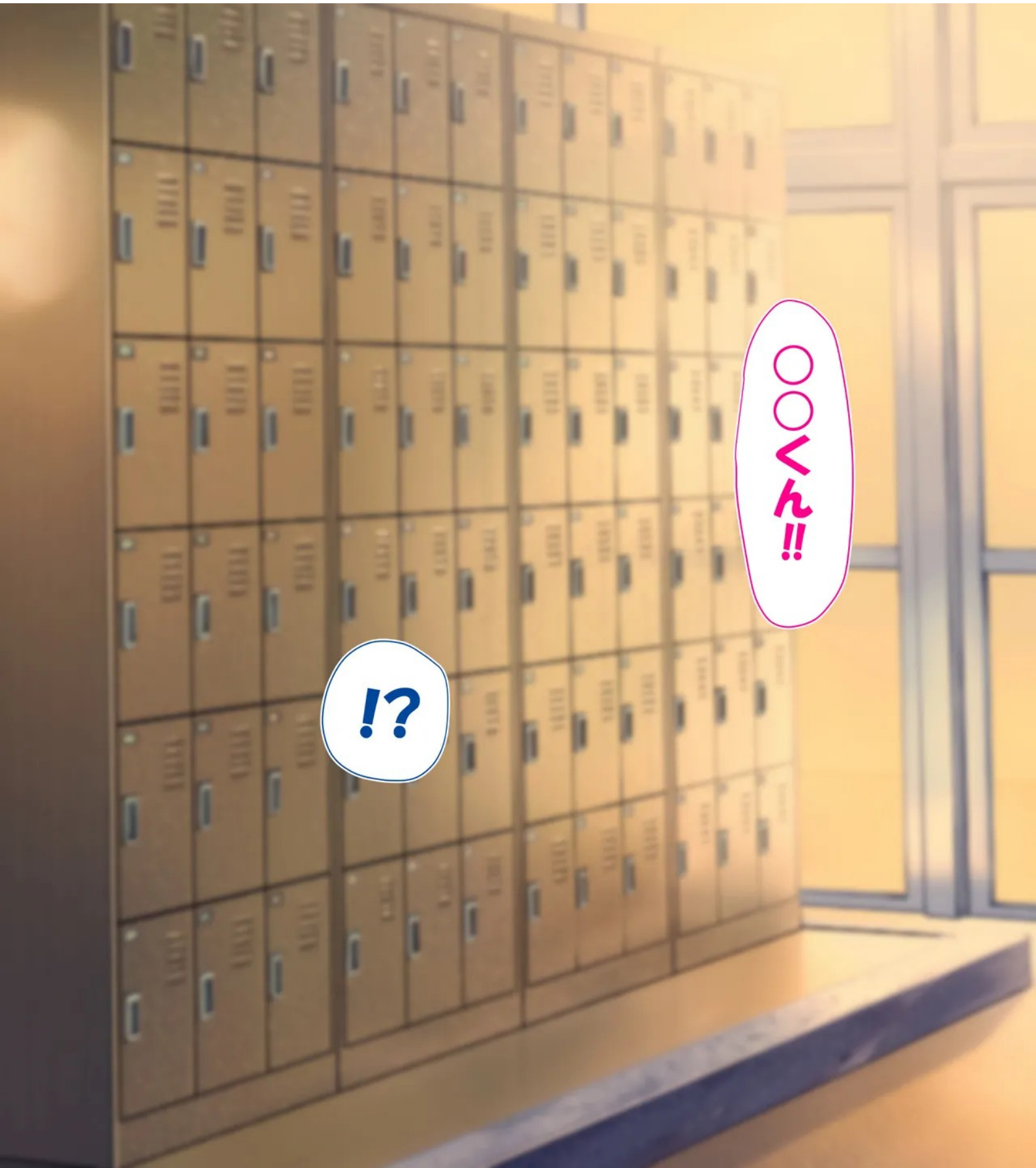
俺は兎耳山を残し、図書室を後にする。
フラれたショックはあったが、思う存分オスとしての本能を満たせたからか、
意外にも心の中は清々しいものだった。

俺が兎耳山をチンコでよがらせ、俺の精液で腹をバランスポールのように膨らませ、
その腹の中を今もなお、俺の精子が泳ぎ回っているのだと思うと
何とも言えない誇らしさがあった。



はぁ…玉砕だな…





○○△ん!!

!?



どうした兎耳山？
まだ精液まみれじゃないか

はぁ
はぁ
はぁ
はぁ

お
お
お
お

帰りの身支度をしているなか、さっき俺に種付けされてた女が
タプタプとボテ腹を揺らしながら駆け寄ってくる。

腹は少し萎んだようだが、相変わらず精液ボテ。
身体もところどころ精液が付着している。

あ…あの

ボテ





あのね...

え...まさか

ちょっと考え直したの...!

ぽろぽろ

っ…付き合っことはできないけど…
赤ちゃん…作るのは…いいよ!

だから…明日も…
よよかったら…

告白…して
くれないかな…!

は?

おっ



じゃ...

じゃあまた
図書室でね!

あ...オイ!

なんだったんだ：「やっぱ付き合う」とか言われるのかと
期待しちゃったじゃないか…。

けど、「赤ちゃん作るのはいい」ってなんだよ……。

またセックスしていいってことかよ…。

まさか、兎耳山ってああ見えて全然清楚じゃないんじゃ……。

けど…、おれはまた図書室に行ってしまうだろうな…。













































